

「第二十八回 三田文學新人賞 佳作」

あたらう

坂崎かおる

四〇六号室の高木さんにもらった最後のものは、ザリガニだった。ザリガニはまだ生まれただで、爪の先ほどだった。それでもよく見れば、透明の体にしっかりとハサミがついていて、ちょこまかと後ろ向きに進む姿はザリガニというよりそのミニチュアのように可愛げがあった。

捕ってきたザリガニに卵ができたから、と高木さんは言った。うちの子は生き物が好きなんですよ、と朗らかに付け加えて。

「捕ってきたのは三カ月も前なんです。しかも一匹だけ」玄関先で、高木さんは誰かに言い訳するみたいだった。「けどどいつの間にか卵を産んで、それが孵ったんです。不思議ですよ。ずっと一人だったのに」

何十匹と産まれたから優くんにかしらと思つて、と高木さんは奥を窺うように付け加えた。優はその時は昼寝の最中だったので、「だーだー」の大騒ぎを近所に聞かれることは免れた。

私はありがとうと言うべきなのか、遠回しに遠慮したいことを伝えるべきなのか、返答に少し困つてしまい、結局短く「それはどうも」とだけ口にした。高木さんは肯定と受けとり、ぐいとプラスチックケースを差し出してきた。私はそれを今更否定する勇気もなく、やはりおずおすと「どうも」と口にして受けとった。

もともと四〇六号室の高木さんと私は、そこまで交流があるわけではない。隣同士であるし、エレベーターに乗り合わせれば軽く世間話はす

るけれど、それ以上のことはなく、「親しいご近所さん」と呼ぶには疎遠な関係であった。けれども、高木さんはマメな性格なのか、何かというところ、「旅行に行ってきたので」「親戚からたくさんもらったので」と言つて、お土産やお裾分けをうちまで持ってきた。自然と、私は同じように返礼する義務を感じ、虚礼のやりとりだけが、お互いの玄関先で幾度も行われていた。

「高木さんも変わった趣味だな」

帰ってきた夫は、テーブルに置かれたザリガニを見てそう言った。私は優におっぱいをあげながら、「なにを食べるのかしら」と訊ねた。

「なんでも食べるんじゃないのか」夫は漠然とした答えを返したが、携帯で検索をしたようで、「ザリガニのエサを細かく砕くといいらしいよ」と付け加えた。

「ザリガニのエサってなによ」

夫は黙つて携帯を私に見せると、確かに「ザリガニのエサ」という商品名の粒々のエサが画面に映っていた。ザリガニだけでなく、カニとかエビとか、他の甲殻類にも使用できることがパッケージには謳われていた。

「どこで買えるんだろう」

「百均とか、ネットとか」

夫は短く答え、風呂に入る準備をし始めた。「まあ、どこでも買えるよ」

確かにどこでも買えるだろう、と私は思った。しかし、私の質問の主旨は「どこ」ではなく「誰が」にあった。もちろん、夫は気が付かなかった。

とりあえず、するめを小さく裂いたものを水槽の中に入れてみた。ザリガニたちは一斉に寄ってきて、小さなハサミを忙しく動かし始めた。その姿はどこかしらユーモラスで、見ていて飽きない。優は見えているのかいのか、水槽を覗きこんでは、きゃつきゃと喜んでいた。

母にザリガニの話をするつもりはなかったのだが、会話がつまると彼女は不機嫌になるし、かといって今さら話すべき話題も私たちの間にはない。その断絶は東西ドイツほど決定的ではないが、ベルリンに行くほど解決策が見えているわけでもなかった。

「あんたも世話が好きだねえ」

むしろ母の調子があっけらかんとしたものだ。しかしそこに私は子供のころから聞かされ続けた彼女の湿り気を感じた。それはほの明るく鈍いものだった。「こんなババアの世話もしなきゃならないのに、ご苦労なことだよ」

母の家はI区の外れにある。父は五年前に死に、その一軒家は十年前のリフォーム以来、色々なものが損なわれていつている。それは壁の染みであり、障子の破れであり、堆積していく無用の通販物品であった。居間の向こうの台所の棚の上と下と前にはそういった彼女の後半生の無意味な地層が出来つつあった。よっこいしよと立ち上がった母は、その地層の最下層の部分をこそごとと始めた。

「あつたあつた」彼女が手にしてきたのは、水槽とろ過器のようなものだった。色あせているが、「お魚元氣！」というパッケージもまだついている。「なんかんときに使えるかなと思って、とつといたんよ」

このまま受けとることは、長期的な視野から考えるとよい方向ではなかった。それは母に誤った自信を植え付けるし、曖昧な優越感を与える

ことにもなった。しかし受けとらないことによるこの場のとりなし方を考えると気が重くなる私としては、やはり受けとらざるを得なかった。私は自分が水槽を抱えて電車に乗るところを想像し、すぐに想像することをやめた。

「あんたの子供のころはいろいろさせたからね」しみじみとした調子で母は言った。「動物園にも連れて行ったし、夏になったらクワガタとかカブトムシとか買ってきてねえ」

それから、「結局私が世話することになったけど」とわざわざ付け加えた。私はそうね、と短く返し、冷蔵庫の中身の仕分けを続けた。月に二回ほどは来ているので、大幅に期限の切れている食材はなかったが、ジップロックに入ったかぼちゃの煮物だったものや発酵した牛乳を捨てた。

「大学院だつてね」

私が断ち切ったはずの会話は、母の中では続いているようだった。

「お父さんの退職金から出してね、海外まで行ってね。まあ、出来のいい娘ですよ」

賞味期限前のフランス産のチーズが出てきたが、私はゴミ袋に捨てた。明日は燃えるゴミの日で、チーズは焼かれて香ばしく腐敗していくのだろう。多少は愉快であったが、多少であった。

「じゃあ、また来週くるから」

私が帰るとき、母は必ず玄関を出て、曲がり角まで送ることが習慣だった。子供のころからそうだった。学校に行くときも、習い事に行くときも、私が一人暮らしを始めたときも、曲がり角の公園の、ちょうどキンモクセイが植わっているあたりに、母はいつまでも立っていた。頑な

に使わない杖の代わりに、ビニール傘を手にとって。夏のキンモクセイは存在感が薄く、ぼんやりした濃い緑の輪郭が母と合わさっていた。

「そういう仕事は」母は訊いた。「今日は休めたのかい」

うん、まあと私は返事をした。その返事の嘘を以前の母なら見抜いただろうが、今の母は気付いたのか、そもそも聞いているのか、頭に残っているのか、それすらも怪しかった。

「あんたは八方美人だから、無理しすぎんようにな」

母はそう言い、私は手を振った。次の曲がり角で振り向くと、母はまだそこに立っていた。

仕事を辞めたのは一カ月前だった。ほとんど逃げるようだった。

保育園に迎えに行くと、優はさつそく、私の抱えている水槽に興味を示した。

「あら、金魚でも飼うんですか？」

先生がそう訊いたが、なぜだかザリガニとは答えにくくて、ええまあ、と私は濁して答えた。優は「だーだー」がうるさくなってきたので、私は彼の右手に、付属品の水温計を持たせた。

「うちも、子供が夏祭りでとってきた金魚がいたんですけど、すぐに死んじゃって」

翌日用のオムツのゴミ袋をセッティングしている私にめがけて、先生は言った。「意外に難しいんですよね、捕るの簡単なんですけど、飼いは続けるのって」

抱っこひもはさすがにこの季節は暑い。優はようやくつかまり立ちができるようになってきたぐらいで、抱えていると行き帰りは息が切れてしまう。出産と骨盤は関係ないという話を聞いたが、それでも産後は腰

のあたりに常に違和感があり、時々自分の歩き方が思い出せなくなってしまう。電動自転車が欲しいと思ったが、夫が快く了承してくれるかがわからず、まだ言い出せないでいた。確かに保育園は歩ける距離にあり、しかも仕事を辞めた今、ますますハードルは高くなってしまった。

前の勤め先は留学生支援の団体だった。市から委託されていて、「国際協力交流協会」という名前がつけられている。産休を経て復帰したが、人間関係で辞めてしまった。その話をしたとき、夫は、「学校じゃないんだから」と鼻で笑っていた。「気楽でいいよな」とまでは言わなかったが。

「こんにちは」

エレベーターを待っているところで、高木さんが声をかけてきた。ふわりとしたスカートで、手には小さな紙袋がひとつ。身軽な人だ、と私は思った。

「暑い日ですね」

「3」で止まった階数表示を見ながら、私は言った。本当に、と高木さんは言っていて、突然、私の腕をとってきた。

「これ、涼しいのよ」

そう言っていて、紙袋から目薬みたいな瓶を出した。それは、と私が問うより早く、中身を腕に垂らした。思わず振り払うと、意外そうに「ごめんなさい」と口にして、それから、目の前でエレベーターが開いた。降りてきた住人が怪訝そうに私たちを見て、会釈をする。私も反射的に会釈をして、それから困惑顔の高木さんを見た。

「ハッカ油」高木さんは瓶を見せた。「涼しくなったでしょ？」

確かに、腕のあたりはひんやりというか、ヒリヒリした感覚だった。いろいろと頭の中に言葉が浮かんだが、結局出てきたのは「ありがとう

「ごきます」で、そんな自分がかっかりした。高木さんはにこつと笑い、「お風呂に垂らすと、すごくいいの。一滴だけで」と付け加えた。

部屋に入り、水道で念入りに腕を洗い、トイレに入った。ザリガニがふわふわと水の中を漂っている。プラスチックケースは、初めはリビングに置こうとしたのだが、優が興味を示しすぎて「だーだー」が止まらなくなり、ご飯が進まなくなったことと、夫が穏やかに、生き物がいる食卓で飯を食うのはいかなものかと意見を述べたために、トイレに移動することになったのだった。

とりあえず母からもらった水槽を棚の上に置いた。本当はカルキ抜きをした水がいいのだろうが、私は面倒で水道水から直接ためた。バケツに移したザリガニたちは、底でじつとしていた。いたずらに指でかきまぜると、わたわたと円を描くように端へ端へと逃げていった。それでも等間隔で、お互いを警戒するように距離を保っているのがおかしかった。

延長コードとエアープンプをつなぐと、泡がぶくぶくと水面を動かした。延長コードとエアープンプをつなぐと、泡がぶくぶくと水面を動かした。はじめた。ザリガニたちは驚いたように、後ろ向きに泳いでいった。水草を入れると、さっそくその周りに群がり始めた。それらの水草のひとつひとつが新鮮で、面白かった。しかし、この五匹のザリガニが、あのザリガニのように大きくなる姿を想像すると、少し憂鬱になった。

川に返すことも考えたが、夫はそういう時に限って「生態系」の話を持ち出し難色を示した。「アメリカザリガニは特定外来生物の指定を検討されているほどなんだ。返すぐらいなら、土にでも埋めた方がいい」

私は父のことを思った。父の骨壺は、まだ母の家にある。

父が亡くなったとき、私は海外の大学院にいた。叔母から連絡が来たのは葬式が終わった翌日で、父が死んだことも、すい臓がんだったことも私が聞いていないことを知ると、彼女は大きなため息を、国際電話特有の時差でもって伝えた。

「これ」

スーツケースを抱えて玄関先に立ち尽くす私に、母は靴箱の上の骨壺を指差した。父の写真が裸でその壺に添えられていた。

「最後は苦しまんかったよ」

しみじみとした口調で母は言った。母の正座は完璧で、腰のあたりのたっぷりとした贅肉と比べ非常にアンバランスに見えた。私は骨壺を開けるべきなのかどうか、そんなことを考え、そして結局開けなかった。それ以来、父の骨壺は桐箱にしまわれたまま、母の寝室のタンスの上に残されている。写真は色あせ、土にも埋まらず。

私の生活は徐々に、ザリガニと同期するようになってきた。

トイレに水槽を移すと、優はあまりザリガニに興味を示さなくなつた。恐らく小さすぎて、うまく視界にとらえることができないのだろう。夫は元より生き物全般に興味がなかった。自然、高木さんの贈り物は、私が管理をするようになった。

朝起きるとトイレに向かい、紫外線のライトの電源を入れ、ザリガニたちの様子をチェックする。運が良ければ後ろ向きでちよこまか泳ぐ姿が見られるし、隠れていても、少しだけ水草の揺れる様子から彼らの存在を把握することはできる。排便を終えると、エサを細かく砕いて水槽に入れる。わわつとザリガニたちが寄ってくる。既にこのザリガニの中でもヒエラルキーがあるようで、まっさきにエサに食いつけるものもい

れば、何となく石の陰に隠れて、しばらくしないと出てこないものもある。時間に余裕があればしばらくその様子を眺めて、彼らがエサを食べつくすまで私はトイレに座っている。

ネットで調べてみて初めて知ったのだが、ザリガニは交尾をしても、すぐに卵が孵化するとは限らないらしい。オスの精子が到達するのに時間がかかれば、何カ月も先に孵ることもよくあるそうだ。高木さんは不思議がついていたが、ザリガニにもザリガニの事情があるのだろう。

木曜日は水替えの日になった。そういう時トイレは便利で、古い水そのまま便器に流してしまえるのが簡便であった。子供のザリガニは小さすぎるので、大きなスポイトをアマゾンで注文して、それで吸うと、なすすべもなくザリガニの子供たちは捕まえられていった。バケツに彼らを移し、水をすくって便器に捨てているときが、その頃の私の最も落ち着く瞬間になった。

「ザリガニの様子はどうかしら」

ある日、高木さんとまたエレベーター前で鉢合わせたとき、彼女はそう訊ねた。「大きくなったんじゃない」

ええまあと私は曖昧に答えた。確かにザリガニは、差はあったものの、小指の先ぐらいの大きさにはなっていた。それから、その答えだけでは不十分だと感じ、「小さくてかわいいですね」と付け加えた。

その答えに高木さんは満足したようだった。

「うちのザリガニも、あれからまた、たくさんすぐ産まれて」

屈託なく高木さんは言った。「ほとんどは川に返してあげたんです。自然で暮らした方がいいでしょう？」

私は曖昧に頷きながら、「生態系」の夫を思い出した。

「だけど、一匹だけ残したんです。私も、これからどんな風に育つのか知りたくて」

それから高木さんは、自分の子供の話に話題を変えていった。他愛もない話だった。公園で転んだけれど泣かずに立ち上がったとか、自分の誕生日に大好きと言ってくれたこととか、よく聞く話だった。私は強張った表情で相槌を打ちながら、何となく、高木さんにもらったものを思い返していた。

最初の頃はお土産やお裾分け程度のやりとりだったが、お下りの服やおもちやをもらうようになった。二カ月ほど前からだ。私がいくら遠慮しても、「いいのよ」と高木さんは言った。ご近所づきあいも親戚づきあいも浅く過ごしてきた私にとって、高木さんのような人の申し出を、どのぐらいの手ごたえでもって断ればいいのかは推し量りかねた。結局、彼女からもらったものは徐々に増え、かといって使う気にもならず、押入れの奥底に誰にも見られないまましまわれている。そんなことを私が思い出している間も、高木さんは淀みなく喋っていた。柔らかなで落ち着きがあって、そして私を不安にさせる声だ。エレベーターはどうに到着していて、不服そうにまた扉を閉ざしていた。

「今日はお仕事は？」

ようやくエレベーターに乗り込むと、高木さんは思いついたように訊いた。私は虚をつかれ、適当な答えが思いつかず、「今日は休みで」と誤魔化した。

「なんでしたっけ、なんとか協会。立派なお仕事ですよ。応援してますよ」

それから、「開」ボタンを押したまま、付け加えた。「私たちの会にもね、この前海外の人が入ってきたんですよ。インドだったかしら。ご紹介しますね」

そして、高木さんは軽やかに行ってしまった。私は扉が閉じた後も、何もせずにしばらくエレベーターの中にいた。自分が何の行き先のボタンも押していないことにも気付いていなかった。

私が勤めていた国際協力交流協会では、主に地域の外国人への支援が主立っていた。外国人留学生や技能実習生のおかげで、海外につながる居住者が増えていた。しかし、当該国同士のコミュニティの形成は浅く、違法な就労や軽微な犯罪が彼らによって起こされ報道されたことで、あまりよい心象は持たれていなかった。

私は英語が話せることもあり、相談員として協会に勤めていた。具体的な就労支援やビザのことなどは、もう少し詳しい部署の職員や市役所に回すのだが、まずは相談のつかかりとして重宝されていた、と思う。

全国的に見れば、在留外国人の割合は中国や韓国、アジア以外ではブラジルなどが多くなるのだが、私の勤めていた地域では、ネパールやタイなどから来る外国人が増えていた。

「要するに、斡旋するブローカーがいるんですよ」

あるとき、柴崎さんは私の疑問にそう答えた。彼女は協会の設立当初から関わっている古株だった。「ほら、駅前にカレー屋とかタイ料理屋とかできることあるでしょ。本国で仕事がないもんだから、ブローカーに借金して、こっちでお店開くんです。ブローカーっていつでも、悪い

奴らだけじゃないけど、中には留学生を違法労働させたり、借金まみれにさせて働かせたり、いろいろあるんですよ」

「なんか、気軽にナンのお代わりもできないですね」

私は冗談のつもりでそのときは言ったのだが、柴崎さんは「そうね」と難しい顔をしていた。

まさか本当に紹介するつもりなどないだろうと思ったけれど、高木さんなら、と心の隅で思っていたことが現実になり、彼女は「インド」の人を、私の元へ連れてきた。

「去年、来たばかりなんですって」高木さんはにこやかに玄関先で私に告げた。「ほら、日本とインドって全然違うじゃない？ 私たちの会の主旨には賛同してくれているんだけど、日本語が通じないことも多くて困ってます」

そして高木さんは言葉を切った。私は何を待たれているのか把握できずに、しばらく高木さんとその「インド」の女性を交互に眺めていたが、どうやら何かしらの肯定的な返答を待たれていることに気が付き、仕方なしに「そうですね」と答えた。高木さんはそうなのよ、と勢いよく頷いた。「インド」の女性は「よろしくお願いします」を、カタカナの日本語で口にした。

「それじゃあ、お話聞いてあげてくださいね」

最後にそう言い残して、高木さんは手を振り戻っていった。水色のワンピース。サンダルからのぞく爪の先も水色だった。女性は戸惑っているようで、去っていった高木さんと私の顔を見比べていた。私は仕方なく、「どうぞ」と中に招き入れた。

彼女の名前はスニータさんと言い、そもそも「インド」ではなく「ネパール」の人だった。

「夫が先にこっちにきて、カレーのお店を開いたんです」スニータさんはそう言った。店は駅から少し歩いたところにある、昔居酒屋が入っていた場所だった。「私は妊娠していたんですけど、日本で産んだ方がいいだろうって、呼び寄せられて来たんです」

子供は今日は知り合いが見てくれているらしい。

「市民センターのふれあい広場で〈はちみつのお会〉を知って、親子で参加していたんです。日本のことも知りたいし、私も初めての子供ですごく不安で。高木さんとはとってもよくしてくれました」

よく話を聞けば、経済的な理由で自分も働きたいということ、子供を保育園に預けられるかということが、彼女の気になっていることだった。就労ビザの話や、園の必要条件などを簡単に伝え、それ以上は市の外国人相談窓口を教えた。スニータさんは熱心にメモをとりながら、「アリガトウゴザイマス」とカタカナでお礼を言った。

話してみると、スニータさんは英語も達者で、聡明であった。ネパールの女性では珍しいと思うのだが、大学にも通っていたらしい。

「観光学を専攻していました」スニータさんは言った。「本当は、日本ではアジア向けの観光会社で働きたいんですけど」

きつとそれはできないだろう、と、彼女は言外に意味をにじませた。そして、「あなたがうらやましいです」と付け加えた。

「子供を育てながら、自分の仕事もできるなんて、日本の女性はうらやましいです」

私はしばらく、彼女が使った〈envy〉の言葉を、舌の先で転がした。何故だか、高木さんの、あのいつも張り付いている笑顔が浮かんだ。言葉を飲み込むと、胃の奥底あたりに重く沈んだ。

会話が途切れ、私はスニータさんが「そろそろ帰ります」と言うことを期待したのだが、彼女は動かなかった。手持無沙汰そうに、きよるきよると私の部屋を見渡し、私の出した麦茶を、空になっても口元で傾けていた。こういう時に、普通の人ができることを、私はよく知らなかったし、学んでこなかった。「帰ってください」を、婉曲に表現するにはどうすればいいんだろうか。もしくは、会話を持たせるための便利なフレーズはどこで買えばいいのだろうか。みな、どんな対人マニュアルを胸に抱えているのだろうか。どこに行けばその単位を取得できるのだろうか。

「ザリガニ」  
仕方がなく、他に選択肢もなく、私はそう口にした。「ザリガニがいるんですけど、見ますか」

大して嬉しくもないだろうに、ぱつとスニータさんは笑顔になり、「見たいです」と言った。さすがに、「トイレにある」と言う時は恥ずかしかつたが、スニータさんは特に気にする様子もなかった。

「スゴイ小さいですね」  
二人で顔を寄せ合って覗きこむと、スニータさんからは独特な香りが出た。香辛料のような、何かのお香のような、深く体に染みついていておいだ。海外には何度か足を運んだことはあるが、私がいつも感じるのにはおいの違いだ。空港から一歩外に出ると、空気の中に混じる何か、人から漂う何か、日本のそれとはどこか違うのだ。私からはどんなにおいがするのだろうか、と私は気になった。もちろん、彼女には訊ねなかった。

「ネパールにはザリガニがいるんですか」  
私が訊くと、彼女は笑って答えた。  
「たまに市場で見かけます。カラアゲになってますけど」

ようやくスニータさんが帰ったあと、私はまた、ザリガニたちを眺めた。彼らはじっと、それぞれの場所で、何かを待っていた。

ザリガニの数が三匹に減っているのに気付いたのは、それから何日か経ってからだった。「ザリガニ飼育基本ページ」というブログには、ザリガニの数が減る理由として、「脱走」と「共食い」を挙げていた。

ザリガニはよく脱走します。ハサミが水槽のふちまで届けば、自分自身をそのまま持ち上げることも可能なので、必ず蓋はしましょう。そうしないと、タンスの後ろから干からびた遺体を発見することになります。

もう一つの「共食い」は、ザリガニとかカニとかではよくあることのように、「狭い水槽の中であればほぼ百パーセント共食いします」と書かれていた。防ぐ手立てとしては、「①水槽を分ける②隠れ家をたくさんつくる③エサをこまめにやる④諦めてバトロワする」という項目が並んでいた。「どうせ何匹も買えないんだから、栄養源を補給するための行為なのだ」という考え方もあります」と、そのブログはやや投げやりに結んでいた。

動揺した私は水をこぼしながら、中に入れていた石や水草をどかし、三匹のザリガニたちをバケツに移した。底にひいた砂利を何度もさらった。水草のいちまいいちまいの裏側を覗いたが、やはり出てこなかった。彼らは共食いしたのだ、おそらく。音もなく。

病院から電話がかかってきたのはそんな時だった。母が階段から落ちたということだった。

「大腿骨の骨折です」

若い医師はそう言った。妙にはきはきとしゃべる医師で、スポーツのインストラクトでも受けている気分になった。「正確には大腿骨頸部骨折で、高齢者には本当に多いけがです。骨粗鬆症が進んでいると、ささいなことで骨折が起きます。例えば、オムツを変えているときとか、ほんのちよつとした衝撃で」

どれぐらいで治るのか、という私の問いに、医師は難しい顔をした。手痛い敗戦の弁を訊かれた監督みたいに。

「手術をすれば骨折自体は治ります。しかし、リハビリには時間がかかるでしょう」医師はカレンダーを見た。「患者さん次第ですが、歩けるようにはなるかもしれません。ただ、以前と同じというわけにもいきません。一年経って、元通りの生活ができる人は、高齢者の場合半分もいません」

母は病室でぼんやりしていた。テレビはついていたが、母の視線はその横の白い壁に向かっていた。

「アヤちゃんが救急車呼んでくれてね」

母は叔母の名前を口にしました。母はまず叔母に電話をし、それから叔母が救急車を呼んだらしい。迂遠な方法も気になったが、最初に電話する相手が自分ではないことに、今更のことながら気持ちが落ち込む自分を発見し、そんなことを発見する自分も嫌だった。

「仕事を休ませちゃって悪いね」

母はそう言い、私は首を振った。何か言葉が続くかと思っただが、それきりだった。母は白い壁を見続け、私は母の襟から覗く、細い首を見ていた。母のあの完璧な正座がきつともう見られないのだろうと思うと、思ったよりも青々とした色を感じた。



帰りにスーパーに寄ると、柴崎さんを見た。とても難しい顔をして、トマトの品定めをしていた。結婚相手でも選んでいるみたいだった。私は彼女が三個目を手にとるまで眺めたあと、何も買わずに店から出た。

柴崎さんは、国際協力交流協会の立役者の一人だった。

会長が三十年ほど前に立ち上げたこの協会で、初期からいるメンバーは柴崎さんだけだった。コマネズミのようにちよこまか常に動き回り、その体からは信じられないくらい大きく響く声を出した。その手の人によくあることで、自信家で、正論を好み、身内に甘く、そして仲間が多かった。

私たちの関係は良好だったと思う。私は非常勤扱いだったが、相談者の話をよく聞くと評判がよかったし、時間外の対応もよく受け付けた。何かと言えばお菓子を配ったり、飲み会ではお酒を注いで愚痴を聞いた。非常勤で、短いながらも産休がとれたのは、柴崎さんの口添えがあったことは否定できない。

きっかけは些細なことだった。いや、それがきっかけだったと正確に言えるわけではないけれど、それ以外に思い当たることがなかった。産休明けすぐに、あるタイ人の女性が相談しに来た際、不法滞在が疑われたために、とりあえずは役所に連絡するのがよいだろうと私は言ったのだが、柴崎さんは断固それに反対をした。私自身は、柴崎さんの勢いに押されて、自分の主張を通すわけでもなく、結局流されるままに会長判断となり、保守的な会長は役所に相談をし、最終的にはその女性は強制送還されることになった。私が柴崎さんに喋った文章は三つで、「不法滞在かもしれません」「市役所に言った方がもしかするといいかも」

「そうですね」だけだったが、柴崎さんには、それ以上に私が強固に主張したように見えたのだろう。あからさまに私に対する対応を変えた。「あなたのご判断はいかが？」

何かというと、柴崎さんはそう訊ねた。訊ねる時、決まって彼女は、わざとらしく、いつもの大きな声を、ひそめた。ひそめながらも、その声は私の耳に響き、腹に残った。その腹に残った言葉は徐々に私の生活に異変を与え、夜眠れなくなり、母乳の出も悪くなり、夜泣きのとまらない子供の頭を一回叩いたとき、私は仕事をやめることを決意した。退職の日に、柴崎さんは年休をとっていて、彼女の顔を私は見ることはなかった。

保育園は求職活動にステータスが切り替わったが、三カ月の猶予がもたらえた。三カ月経って、私が仕事を見つけられなければ、退園となる。そこからどうすればいいのか、私はわからなかった。夫は「別に働かなくてもいいだろう」とは言っていた。言っただけだが、私は夫の渡す少ない食費でやりくりをしなければならず、仕事をする必要性を感じていた。しかし、保育園に入るためには仕事の実績が必要になり、実績をつくるためには子供をどこかに預けなければならない。保育園に入れるためにどこかに預けて働く必要がある。これは大いなる矛盾であった。大いなる矛盾。ディッケンズみたいだ。

仕事を辞めたことは、夫と、保育園の事務の人にしか言っていない。だから、昼中に町を歩くと、私はまわりの視線が気になるようになった。保育園に子供を預け、スーパーでトマトを選んだりしている自分が、何かよくないことをしているのではないか、そんな思いが、心の奥底で、カレーが鍋にこびりついたみたいに、どうしてもとれなかった。そんなわけで、一駅先のスーパーを使うようになったり、なるべく夕方

に出歩くようにしたり、「まあ夏休みだと思えばいいじゃん」と軽く言い放った夫の言葉とは裏腹に、私の生活は何か固定化されていった。

《はちみつの会》に参加するようになったのは、そういう「何か」を振り払いたい思いがあったから、というのが、自分の中で結論付けた理由だった。でも、それを明確に言語化できたのは会に入りのころをやめてからで、結局は、高木さんに誘われるままについていった、というのが客観的な見方だろう。「ほら、お仕事休みの時でも、気晴らしに」という高木さんの言葉は、その頃の私にとっては抗いがたい誘惑だった。

会は、毎週火曜日と土曜日に、近くの地域センターの一室で、親子ヨガを行っていた。そこまで本格的なものでもなく、どちらかというと情報交換やおしゃべりがメインであった。高木さんは子供の扱い方がうまく、しばらく自分だけの時間がとれたことはありがたかった。恐らくは専業主婦であろう母親たちと語らう時間は、自分が何者かであることを確認できるかのように心地がよいと共に、しかし、そこでも私は自分を偽っているような感覚を拭うことはできなかった。

スニータさんから「また話をしたい」と連絡が来た時に、私は少し嫌な感じがしたし、《はちみつの会》のことを思い出したのも事実だった。

「よくわからないものを渡されて」

今度は、スニータさんの開店前のカレー屋で話をした。旦那さんはいこやかに奥の席を案内し、スムージーまでサービスしてくれた。

「ちよっと日本語がよくわからなくて、なんだか、赤ちゃんの肌に良いみたいなことを言われたんですけど」そう言って、スニータさんは瓶を

見せた。中には橙色のクリームのようなものが入っている。「これは日本では一般的なのですか？」

「無添加ナチュラルスキンケアクリーム」とラベリングされた瓶には成分表が貼ってあって、「ホホバ油」とか「みつろう」などが入っているようだった。製造者は「はちみつの会」。私は成分について、携帯で調べながらスニータさんにいちいち説明したが、彼女自信もあまり聞きなじみがないらしく、私の英語に首をかしげていた。

「使わなくていいと思いますよ」

私は彼女に教えた。「好意で渡しているんですけど、赤ちゃんの肌って人それぞれなので、自家製のものは使わない方がいいです」

「そうですね」

スニータさんはほっとしたようだった。

「もう《はちみつの会》には行っていないのですか？ 高木さんが、昔は来ていたって言うていたので」

スニータさんの質問に私はどう答えようか迷ったが、正直に話すことにした。日本語では話しにくいのが、英語であれば、ストレートに伝えられそうだった。

「スニータさんは、子供にワクチン接種はしましたか？」

Sure、と彼女は答えた。私は頷いた。

「私も子供には当然ですが、ワクチン接種を行っています。でも、《はちみつの会》の人たちは、ワクチンの有効性と安全性に懐疑的です。私はそこに疑問を感じて、会に行くのをやめてしまいました」

「そうだったんですか」

スニータさんの様子を見て、私は話を続けた。

「もちろん、主義主張は各人の自由です。スニータさんがこれからどうするかは、あなたの自由だとは思いますが。ただ、私は、大人の理屈に子供を巻き込みたくないとは思いますが」

私の言葉に、スニータさんは深く頷いた。少し会話が途切れたところで、旦那さんが子供を連れてきた。そろそろ開店になるようだ。赤ん坊はよく眠っていて、唇はスニータさんにそっくりだった。

「ザリガニは元気ですか」

見送りながら、スニータさんはそう訊いた。私は笑って、「カラアゲにはしてないですよ」と言うと、彼女もつられて笑顔になった。

高木さんが最初に持ってきたものを、私はよく覚えていないが、私が最初に渡したものは覚えている。小さな北欧製の木琴だ。デパートで売り場の人に相談をし、財布の事情に鑑みて、その洒落た見た目の楽器を贈った。高木さんは大いに喜び、「子供の脳の発達はまだ音楽からなのよ」と、「脳科学による」自説を展開し、お返しに彼女から無農薬野菜のセットをもらった。

ときどき、開放した窓から、木琴の音が、ぼろんぼろんと、聞こえてくることがあった。それは音楽にはなっておらず、細切れの言葉のように、風に乗って響いてきた。

久しぶりにそのことを思い出したのは、マンションのごみ捨て場に、その木琴が捨ててあったからだ。他の燃えるごみのクズと一緒に、半透明のごみ袋の中に、木琴は入れられていた。私は迷うことなくゴミ袋を開くと、その木琴をとりだした。部屋に戻って、アルコールで消毒し、しばらく日に当ててから、ぼろんぼろんと叩き始めた。私には音楽の素養がないので、やはりそれも途切れ途切れの音となって響いた。あれは

きつと。自分で叩いてみて、私は初めてわかった。あれはきつと、高木さんが自分で奏でていたのだろう。

通知音が鳴ったので、携帯を見ると、スニータさんからだった。絵文字と共に、今日の昼食に食べたもの（カレー）、最近の子供の様子などが書かれていた。私は一読して、また携帯を放り出し、木琴を奏で始めた。ぼろんぼろん。

あれから、スニータさんは毎日連絡を寄越すようになっていた。

LINEの時もあれば、電話の時もあった。〈はちみつのお会〉のこともあれば、日本社会への恨みつらみもあった。私はいちいち丁寧に答え、返信をしていたが、だんだんと彼女の言葉を聞くことが、目にするのが辛くなってきた。すると、決まって、柴崎さんの顔が浮かんだ。

「あなたのご判断はいかが？」

それでも私は、スニータさんの連絡を無視することができなかった。しかし、無視はできなかったが、その返答はおざなりになっていった。

一日後に言葉を返すこともあれば、留守番電話にすることもあった。

私は、隣駅まで歩く時に使っていたルートを変え、カレー屋の前を通ることを避け始めた。しかし、スニータさんの通知は鳴りやまなかった。可愛らしい絵文字と英語、時々日本語。私の生活は、また何かに固定化され始めていった。

私は母の家の片づけを始めた。入院が長引きそうなか、あの地層を含め、整理が必要だった。

冷蔵庫に入っているものはすべて捨てた。タンスの中の着物も業者に売った。地層も上澄みから順番に分別し処理していった。その間に、延び延びになっていた母の手術日が決まり、ザリガニは何回目かの脱皮を

行い、高木さんは相変わらず手に何も持たずに歩いていった。母の日記でも出てきたら面白いと思っただが、元々飽きっぽい彼女がそんなことをするはずもなかった。出てきたのは昭和と平成が混ざり合った年賀状ぐらいだった。

地層が平らかになれば終わりになると考えていたが、押入れの中も相応な混沌を表現していた。段ボールがいくつも入っているのだが、母が独自の基準で分類しているせいで、その中身に秩序はなかった。私の子供のころの洋服と、期限の切れた高齢者のバス乗車券が同居していた。業者に頼むことが最善だとわかってはいたが、どうしてもそうはしたくなかった。他人に触られたくないというわけではない。自分の手で、この無為の塊たちを分別していきたかったのだ。それは思いやりではなく、復讐に似ていた。

「あんたは子供なのよ」

着替えを持っていったとき、母はそう言った。相変わらず白い壁を見つめて。その言葉の前後に脈絡はなかった。私は天気の話をしていった。明日はまた暑くなるようだと言え、母は「あんたは子供なのよ」と言い、そうかもねと私は呟いた。そして、次の水曜日にまた来ることを告げた。母は返事をしなかった。

ものは雑多にあったが、父のものは驚くほど少なかった。父が死んだあと、母はその全てを捨ててしまったのだろう。歳をとってからかぶっていたベレー帽も、退職祝いの腕時計も、跡形もなく消え失せ、それがあつたであろう場所には、高校のころの制服や、母のネックレスが納まっていた。確実に父のものだと言えるのは、あの骨壺ぐらいなものだった。

ただ、昆虫の図鑑は置いてあった。私が中学生のころ、父が買ってきたものだった。誕生日でも何の記念日でもなく、父がふらっと買ってきて、ふらっと私の机に置いていった。「お前欲しがってただろう」と、父は言ったが、それは小学生のときの話だった。私はお義理に何ページかめくつたが、思ったよりも自分が昆虫の造形に気持ち悪さを感じていることに気が付き、結局本棚の奥深くにしまわれ、そして二度と出されることはなかった。

ばらばらとめくってみると、思春期に感じた不快感は薄れていた。アフリカのハナムグリは鮮やかな色で、私はマダガスカルの子ザナミマラガシーハナムグリが気に入った。背中の部分が本物の波のように水色の線で塗られている。図鑑は誰にも読まれることはなかったようで、糊付けされたみたいにはりばりとしていて、私は紙のざらりを感じながらその水色を撫ぜた。

昆虫の図鑑のくせに、最後のページにはなぜか「生き物の飼い方」コーナーがあり、ザリガニが記載されていた。目新しいことは特にはなかったが、「ザリガニは不死身？」という項目が気になった。

ザリガニは死ぬまで脱皮を繰り返します。そのとき、胃や腸にあたる部分も脱皮するので、体の中まで新品です。もしかしたら不死身なのかも？

なるほど、外見も中身も、毎回脱ぎ捨てられたらどんなにか楽だろうと私は思った。手ぶらで、軽やかで、新しい人生を毎回毎回歩むのだ。私は四十五リットルの袋の山と、分別しきれない段ボールの遺跡群を眺め、嘆息し、図鑑を燃えるゴミの袋に投げこんだ。

「お仕事お辞めになったの？」

高木さんにそう言われたのは、アルバイトの面接の帰りだった。「まだお子さん小さいんだから」と店長の女性に言われ、履歴書もその場で返された。特技の欄にはTOEFLの点数と海外生活経験が書いてあったが、彼女は恐らく一瞥もしなかった。それはその職場の職種適正的に非常に正しく、正確な行動ただだけに、私は小さく小さく履歴書の紙を折りたたみながら歩いた。高木さんに声をかけられたのは、折りたたみ六回目に挑戦しているころだった。高木さんとはよく町で会う。なぜなら高木さんはよく町を歩いているからだ。どうして町を歩くかというのと、と三段論法の構えの破れを見せたところで、私は考えるのをやめた。

天気の話と、気圧の話と、季節の変わり目に風邪をひきやすい話と、病気になるようなときは「病気にはならない」と言い聞かせることが大事だということが脳科学的に証明されているという話と、お手製のハーブティーの配合についてひと通り高木さんは話し、私がそのたびに首肯している運動の隙間に、「お仕事お辞めになったの？」という言葉をねじこんできた。私は歩みを止め、高木さんはじっと私を見た。私が返事をする前に、「柴崎さんという方にうかがったのよ」と彼女は続けた。「スニータさんが会にいらっしやらなくなったから、気になって」私は何回か高木さんの連絡を無視しており、彼女は直接国際協力交流協会に電話をかけたらしい。「そしたら、お辞めになったとうかがって、びっくりしちゃって」

その日、高木さんは長袖のカーディガンを羽織っていた。まだ空気の芯に暑さが残っているような時期だったので、私は訝しみながら彼女の

袖口を眺めていた。高木さんは汗ひとつかいておらず、さり気なく私の手を握った。

「なんだか、ご苦労されたみたいね。私でよければ相談に乗るから」

私は高木さんの手を振りほどいた。その動きは自分の想像よりも強く、高木さんは何歩かたじろいだ。少し驚いたように彼女は目を開き、それでも半歩私に歩み寄った。これが怒りであることに私は気がついた。でも私は怒りについて詳しくなかった。正確に言えば、他者の怒りについて私は敏感であったが、自身が内包する憤懣についてはそれを表出する手段を持ち合わせていなかった。だから私は動きを止めたまま、高木さんから目をそらし、「ごめんなさい」とだけ口にした。

「こちらこそごめんなさい」

高木さんは私の謝罪を素直に受けとった。「気持ちのいい話題ではないですものね」

そういうことではない、と私は言いたかった。私の怒りはあなたのその言葉で規定されるものではない。私の怒りは私だけのもので、誰かの解釈の所有物になるものではない、私は私の怒りの領分を誰かに明け渡してはいない……そんなことが恐らく頭の中を渦巻いていたのだろうが、私は何一つ言葉にすることはできず、「こちらこそ」と頭を下げ、用もない銀行の中へと逃げるように入った。イギリスの貴族のような配の銀行員が「ご用件は」と訊いた。「用件」と私は呟いた。「ええ、ご用件を」と彼は続け、「何もないんです」と私は答え、イギリス紳士の老銀行員は、困ったように「そういうこともありますね」と答えた。

家に帰り、トイレに入ると、ザリガニが共食いをしていた。

——すみません、市民センターにあるふれあい広場のことで、お伝えしたいことがあって。

私にそのとき便意はなく、スマホを片手に、役所の子ども家庭支援課へ電話をかけたところだった。田中という活舌の悪い若い声の女性が出た。

——ふれあい広場に貼ってある、母親向けのサークルのチラシで気になるものがあったんです。

初めはお互いじゃれ合っているように見えた。だが、次第に様子が違うことに気がついた。

——「はちみつのお会」っていうサークルなんですけど、なんだか内容がちよつとあやしくって。

ハサミでお互いをつかむようにしていたが、徐々にケースの隅に戦いの場を移していった。そして、一回り大きい方のザリガニが、巧みに相手の尾を挟むと、そこからは一方的であった。

——反ワクチンみたいなことを言っていて、なんかそういうサークルの張り紙が、役所の運営するところに貼ってあるのもちよつとどうかなと思います。

その大きいザリガニは、相手の薄い腹の殻を食い破ると、少しずつ中身を食べていった。時間のかかる作業であったけれど、食べられている方は食べられていることにも気が付いていない様子でしばらくじたばたしていたが、やがて諦めたように動かなくなった。それでもまだ生きていて、食べられるたびに、後ろ脚がびよこびよここと痙攣するように動いていた。

——いや、何かされたってわけじゃないんですけど、いちおう、お知らせした方がいいかなと思います。

頭の部分だけ食べ残すと、片方のザリガニは何事もなかったかのようにその場を離れ、またすいすいと後ろ向きに泳いで水草の向こうへ消えた。

——はい、いえ、名前はちよつと。よろしくお願ひいたします。

電話を切ると、食べられたザリガニの黒い目の部分が紙切れのように、エアーパープの泡にゆられて、ふわふわ漂っていた。

次の日、高木さんと駅で会った。

高木さんはいつもの通り、手ぶらに近い格好で、人ごみの中を歩いていた。高木さんの歩くルートが決まっていることに、私は少し前から気がついていて、駅、公園、スーパー、保育園、ときどき図書館。順番は入れ替わるとはあっても、おおよそそれらを点として、ぐるぐると歩き回っていた。

高木さんはふわふわと浮いているような足取りで、遠目からでも、彼女の肌はまっさらで、その周りは涼しげであった。普段なら見なかったふりをするだろうに、彼女に話しかけてしまったのは、その涼しさのせいであったのかもしれない。

「こんにちは」

いつものような高木さんの笑顔が、私には救いであり、呪いであった。お元気でしたか、ええまあ、暑いですからね、といった虚のようなやりとりを立ち止まって繰り返した後、同じく帰り道だという高木さんと、肩を並べて歩いた。

「そういえば、スニータさん」

高木さんは言った。

「この前やっと連絡がとれて、なんでもお国に帰るんだとか」

私は未読マークがついた彼女のメッセージを思い出していた。もう私は、彼女に返事をしていなかった。

「悩んでいることとかがあるのかしらね」

高木さんはなおも続けた。わからない、と私は答え、役所の外国人に対する無理解について訴えていた彼女の声を思い出していた。あなたのご判断は。柴崎さんは訊く。コマネズミの身体からよく響く声で。何度も何度も、私はその声に首を振り続けていた。

「本当に、子供を産むって大変よね」

高木さんはしみじみと言い、自分のお腹をさすった。彼女の平らかなその部分は頼りなく、触れると割れてしまいそうだった。高木さんは前を見て歩いてきた。足どりはしつかりしている。でも、一歩一歩踏み出すたびに、彼女のその平らかなおへそのあたりが、ぎしぎしと傷んだ音を立てているようだった。もしかしたら私は、その痛みに手を当てられないのではないか。私は彼女のために何かを為しあたうのではないか。そう思い、口を開きかけ、でも、前しか見つめていない高木さんの横顔を見て、ためらい、やはり何も言えなかった。

しばらく無言で私たちは歩いてきた。我慢ができなかったのは私の方だった。「ザリガニ、数が減ってしまつて」

共食いで、とは言わなかった。高木さんは、それは残念ね、と言った。他人のことなのだから仕方ないのだが、それでも他人事のように言う高木さんの声は小さかった。

「うちの一匹は、とっても大きくなつたわ」

遠くを見ながら高木さんは言った。「時々スルメをあげるんだけど、私の顔がわかるのね。近づくと、ハサミを広げて、よこせよこせつて。」

上手に先つぽをつかむと、色んな足を使って、ちよつとずつ食べるのよ」

同じような経験を私はしていた。ザリガニの、エサを抱えるように食べる姿は愛らしく、いつまでも見ていたい気持ちになった。だが、高木さんも似た感情を抱いていることを、何だか妬ましく思った。

保育園に着いた頃、私はあいさつをしてそのまま別れようとしたのだが、高木さんは呼び止めた。

「そういえば、おっぱいの調子はどう？」

突然訊かれたので、思わず私はあたりを憚るように見回した。確かに以前、〈はちみつのお会〉で、母乳の出が悪く、母乳外来に通つたという話をしたことがあつた。

「あんまり調子はよくないですけど、混ミでやってますし、大丈夫ですよ」

しかし高木さんは、あまり大丈夫だという顔をしなかった。母乳は赤ん坊に必要な不可欠な栄養素であること、母親との接触の時間が減ることによる発達の課題、乳幼児突然死症候群のリスクの問題などを、早口で私に伝えてくれた。私は簡単に礼を言い、お迎えの時間があるからとこの場で別れ、保育園の中に入った。高木さんがじつとこちらを見送っている視線を背中に感じながら。

じゃがいもは乱切りにして、にんじんは半月切り。たまねぎをスライサーで薄くしたところで、私は自分が何を作りたいのかわからなくなつていた。優が泣き始めた。抱きかかえ、背中をとんとん叩く。力をこめすぎないように気をつけながら。

テレビをつけると、ニュースがやっていった。小学生の列に車がつつこんだが、幸いにも人がいかなかった、とキャスターが、少し明るさをにじませながら原稿を読んでいた。天気予報に切り替わり、全国的に続いた猛暑が来週にはおさまることを、今度はやや明るさのトーンをあげて、キャスターが伝えた。優はまた眠ったが、横になると泣き出す気配があった。その場面だけ切り取ると、私たちの世界は明るかった。明るく、静かで、どこにもいけなかった。その明るさに耐えられなくなる

と、私は決まってトイレに行った。

ザリガニの数は二匹にまで減っていた。二匹のうち、一匹は明らかに体格差があった。共食いを仕掛けているのがどちらであるかは、明らかであった。私は優を抱きかかえたまま、そのザリガニをつかんだ。私はザリガニをつかむのが上手になっていた。ユツは、つかむときにハサミの前で、手をひらひらとさせることだ。相手が威嚇したところで、逆の手でそつと胴体をつかむと、挟まれることがない。だけど、そんなことが何の役に立つのだろう。履歴書の特技欄に書くこともできない。

しばらく私はザリガニをつかんでいた。小さなザリガニは、ハサミを振り回しながら威嚇を続けていた。握りつぶすのは簡単だった。このまま便器に流してしまってもよかった。「土にでも埋め」ることもできた。何が正しいのか、私はいま、自分の心をどうやって規定しているのか、よくわからなかった。

「うらやましいです」

スニータさんの言葉を、私は思い出した。結局、私は彼女の最後の誘いを断れず、会う約束をした。彼女のカレー屋の、一番奥の席で。「いいですか」と言っ、スニータさんは、ビールに三ツ矢サイダーを混ぜた。

「ネパールでは、あんまり女性はお酒を飲めませんから」

私は少し緊張しながら顔を合わせたのだが、スニータさんは、私の投げやりな返事のことなど気にしていないように見えた。少なくとも、そう振舞っていた。彼女は、ネパールに帰ると言っていた。

「たぶん、ここは、私の居場所じゃないんです」

そして、それを教えてくれたのが私であると、彼女は伝えた。私は驚き、訝しんだ。「うらやましいです」と彼女は言った。

「忙しいのに、私の話を聞いてくれて、〈はちみつのお〉のこともはっきり伝えてくれて。たぶん、日本に来て、初めてちゃんと話した人だったと思います」

そんなことはない、と私は強く否定したが、彼女はそれを真面目に受け取らなかった。お酒が入ると、スニータさんは饒舌になり、色々な昔話をしてくれた。ダサイン祭りで弟がテイカをつけられて泣いたこと、ブトワルで医師として働く兄が Dengue 熱で死にかけたこと、父が自分の結婚には反対だったこと。

「ネパールでは、娘は女神だって言われてるんですよ？」

クマリという生き神様を初潮前の少女から選ぶ儀式があり、私はそのクマリが住むというダルパール広場の館を見学したことがあった。「お父様も大切にされてたんでしょうね」

「それはそうだけど」

スニータさんは目を瞬かせた。「その大切はちよつと意味が違うと思う」

「違う？」

「それは、高価なものとか、壊れやすいものとかに使う言葉だと思う」でも自分はそうじゃないとスニータさんは言った。「私は私のやりたい



と思うことを大切にしてほしいと感じます。一人の個人として。でもネパールの女性にとって、そういう大切の方法で大切にされることは難しい」

私は女神じゃなくて、人間になりたいんです。そう言う彼女の言葉はもう、ささやきに近くなっていました。少し顔をうつむかせ、「ごめんなさい」と言つて、彼女は席を立った。私はひとり席に座り、開店前の店の、忙しくもゆつたりとした音を聞いていた。

「それでもない」

私は小さな声で呟いた。スニータさんの顔は消え、私はトイレにいた。子供を抱き、ザリガニを手持っていた。「それでもない」

優の顔が浮かび、夫の顔が浮かび、柴崎さんの顔が浮かび、母の顔が浮かび、高木さんの顔が浮かんだ。人間の形でい続けることは、本当に難しい。

だから、あまり高木さんには会いたくなかった。けれど、インターホンが鳴れば、出ないわけにはいかない。

「お時間大丈夫かしら」

高木さんは手にビニール袋を持っていた。私は優を抱え、ぼんやりした表情で高木さんを見た。高木さんはいつものようににこやかで、でもどこか皺の多い顔をしていた。私より年上とはいえ、こんなに年老いて、翳のある人だったのだろうか。

「これ、もしよければと思って」

反射的にビニール袋を手にとると、それはひんやり冷たかった。ついさっきまで冷凍庫に入っていたのだろうか。中を覗くと、ジップロック

がいくつか入っていた。ジップロックの中で、クリーム色の何かが凍っていた。私にはそれが何であるか、すぐにわかった。

「湯せんで融かせばすぐに使えるから。優くんにどうかと思つて」

優は幸いにも眠っていた。私は彼の頭をしかと抱き、ビニール袋を高木さんに返した。

「これは頂けません」

私ははつきり答えた。初めて口にした、断りの言葉だった。

「遠慮しないで。本当に栄養は子供に大事だから」

高木さんはにこやかな表情のまま、そこに困ったような声色を含ませてもう一度ビニール袋を差し出した。私は今度は手を出さなかった。風は吹いていなかった。

「私は」

そう高木さんは言った。手は戻されていた。「優君が心配で。やつぱり、小さいころにちゃんと栄養をとるのが、大切だから」

だけどあなたは。私は口にした。しかし、それは声にならなかった。空気がやわらいでいることを感じた。私は秋が来たことを知った。

玄関先で。子供を抱えて。

高木さんが帰った後、私は玄関からしばらく動けなかった。考えたくはなかった。想像をしたくなかった。町を歩き回る高木さんを。どこに行くでもなく、あてもなく通りから通りへと、何かを探すように、何も持たずに、空っぽのまま、まっすぐ進んでいく彼女を。そして家に帰り、彼女が薄暗い部屋で自分の乳房を手取る姿を。自分の母乳を絞り出し、乳白色のジップロックの蓋を閉め、冷凍庫に横たえる姿を。それをいつたいたいほどの時間、どれほどの孤独で、続けてきたかを。

母の手術の日はよく晴れていた。

私はザリガニを入れたプラスチックケースを提げ、マンシヨンの横の雑木林に向かっていった。どうやらマンシヨンの敷地のひとつということになるらしいのだが、手入は年に一回ほどで、見た目はずいぶん鬱蒼としていた。しかし、中は意外に開けていて、天気の良い日はよく優を連れてお弁当を食べた。

林のちょうど真ん中あたりで、私は立ち止まり、袋を下ろした。腐葉土のような地面は柔らかく、スポンジのようだった。私はスコップを地面に立てた。何年前前の大雪の日に買ったもので、数回しか出番のなかったそれは新品のように鈍く輝いていた。私は地面を掘り始めた。ザリガニを埋めるために。

子供のころ、トカゲを捕ってきたことがある。母はすぐに捨てるように命じたが、珍しく私は頑なに首を振った。母は根負けし、家の中で飼うことが許された。クワガタが入っていた虫かごのプラスチックケースに土と木の枝を入れ、私はわくわくしてその中にトカゲをそっと置いた。初めての場所に戸惑っているようで、トカゲはじっとしていた。

翌日に図書室に行き、生き物の飼い方の本から、トカゲが生きた虫しか食べないことを知った。私は学校の裏庭の草むらをかき分け、名前の知らない小さな虫たちをつかまえ、意気揚々と家に持ち帰った。しかし、トカゲは食べなかった。プラスチックのかごの中で、名前の知らない羽虫とダンゴムシが、のろのろと飛んだり歩いたりして、トカゲはねめつけるようにしながら、決して体を動かさなかった。返してあげなさい、と母は言ったが、私は他の食べ物を試した。ソーセイジの切れ端を動かしてみたり、ゼリーを置いてみたりしたが、効果はなかった。数日のうちに、トカゲは死んだ。

気がつくくと、だいぶ深く穴を掘っていた。ザリガニというか、子猫でも埋められそうだった。そう言えばあの死んだトカゲはどうしたか、と考えると、母が捨てたことを思い出した。母は私に一言も声をかけることなく、かごからトカゲをつまむと、台所の窓から庭に向かって投げた。その一連の動きは正確で的確で、私に口を挟む余地はなかった。それきり母もトカゲのことは口に出さなかった。腐ったゼリーの入った虫かごがなければ、最初からトカゲなど存在しなかったみたいだった。私は穴を掘っている。ざくざく。腐ったゼリーのびらんなおい。そこにあつたもの、なかったもの、あつたのになかったことにされたもの。私はそういう穴の中を生きてきたのだ。今まで。

どこかで救急車のサイレンが鳴り、それを合図のようにして私は手を止めた。母の手術は終わっただろうか。時計がないので正しくはわからない。穏やかな昼下がりで。きつと無事に済んだことだろう。ほとんど失敗することのない簡単な手術だ。失敗などするはずがない。母は生き続けるのだ。

穴はだいぶ深かった。小柄な人間なら入れるのではないかと思うぐらいだ。少なくとも、ザリガニを埋めるには大きすぎた。私は何を埋めたかったのかわからなくなり、ザリガニのケースを手にとった。

ケースの中のザリガニはもぞもぞと動いていた。ずっと共食いをし続けたザリガニだ。もう私は埋めることを決めていた。いつから決めていたのだろう。共食いをする場面を見たときか。スニータさんが国に帰ると知ってからか。母が入院してからか。あるいは、このザリガニを高木さんからもらったその日からか。

だが、私はザリガニを出さなかった。ザリガニは身をくねらせていたかと思うと、脱皮をしたのだ。あつという間の出来事だった。すっぽり

と、古い服を脱ぎ捨てるように、白く薄く透明な抜け殻が残り、ザリガニは薄赤く、その身を止めていた。私は息を吐いた。自分でも信じられないくらい、長く長く吐いた。肺の中の空気すべてを出し尽くして、心臓や胃からも出し続けたみたいだった。このザリガニはあのザリガニではないのだ、と私は思った。このザリガニは、違うのだ。

私は抜け殻をまじまじと見た。胴体やハサミはもちろん、ひげの先まできれいに残った脱皮だった。あまりにも見事で、もう一匹戻ってきたかのようにだった。私はこの抜け殻を穴に埋めることにした。ひとつひとつ体をばらしていった。まず尾、それから脚を八本、ハサミ、頭。順番に穴に入れて、丁寧に土をかぶせると、もうザリガニは見えなくなつた。

部屋に戻ると夫はいびきをかいて寝ていた。優も遊び疲れたのか、子供用椅子の背もたれにもたれかかってうつらうつらしていた。私は夫の顔をまじまじと見た。口が半開きになり、本人が自慢にしている虫歯一つない歯並びがじつとりと涎で濡れていた。私は夫の頬を撫で、無精ひげを指でつまむと、一気に引き抜いた。奇妙な声をあげて、夫は目を覚ました。

「何だよ」

私は笑って首を振った。そして、抜いたばかりの髭を眺めた後、ゴミ箱に捨てた。病院に電話をかけると、母の手術は終わり、リハビリの予定を確認された。道はまだ続いている。

それから何日か後、高木さんは引越しをした。

私はその日、友人に仕事を紹介してもらうため、外出していた。その間に、どうやら業者が来て荷物を運び出したらしい。帰って来た時には

表札が外されていて、中を管理会社が点検していた。玄関から見渡せる部屋には何もなく、「何もないんだ」と声に出して呟いた。優を抱えたまま、「高木さん」だった玄関を、私はしばらく眺めていた。

「あいさつもないなんて非常識だな」

帰ってきた夫はそんなことを言った。「こっちだって、何かいろいろあげたりしてたんだろ？」

「その分、いろいろもらったりしたけど」

そう言うことから、私はなぜ高木さんを弁護するようなことを口にしたのだろうと、不思議に思った。夫は不満そうな顔をしたが、それ以上文句を続けることはなく、「まあでも」と付け加えた。

「ひとり暮らしだったんだから、荷物も少なくて早かっただろうな」

私は頷いた。夫に見せるように、何度も頷いた。それからトイレに行つた。

ザリガニはついに一匹になっていた。体の大きさは、想像通りのザリガニに近くなってきていた。そして、広くなった水槽を、我が物顔で歩き、手をかざすと後ろ向きにするりと泳いで逃げた。私はその姿を目で追いながら、こうなることは初めから自分が予感していたことに気が付いていた。隠れ家を増やし、エサも与え、住処も広くしたけれど、結局ザリガニが一人になってしまっただろうことに、私は初めから気付いていた。与えることと奪うことは似ている。私は思った。何かを与えられる時、人はその何かのために自分の領分を明け渡さなければならぬ。私は初めから気付いていたのだ。

高木さんが一匹だけ残したというザリガニの赤ちゃんを、私は考えた。高木さんはそれを引っ越し先に持って行ったのだろうか。きつと持って行っただろうと私は思った。川に放さず土に埋めず、プラスチックの

水槽の檻の中でだんだん大きくなるザリガニを思い浮かべて、私は祈った。